

羅針盤 vol.32 校長 白岩博明



上左：旧校舎玄関前のロータリーにあった校訓碑。色鮮やかなつつじが印象的でした。
 上右：正門左側、テニスコート横に移設された校訓碑。木漏れ日を浴びて輝いている？
 左：先日、1号館エントランスの壁面に取りつけた校訓扁額。旧校舎講堂の出入口の上部にあったもの。

校訓（建学の精神）「報恩感謝・実践」のこと

9月8日（火）、校訓（建学の精神）扁額を1号館エントランスの壁面に取り付けました。この扁額は旧校舎講堂出入口の上部に設置されていたものです。暫くの間、プレハブ倉庫に眠っていましたが、やっと収まりどころを見つけました。3階から階段を下るときには必ず視野に飛び込みます。常に目にすることで、校訓（建学の精神）の想いを噛みしめたいものです。

さて、扁額の書は、そのまま碑に刻まれています。所以は次の通りです。

【学校通信より】（2019年3月 第147号）

移設された校訓碑は昭和55年度から昭和61年度までの卒業生から贈られたもので、碑の書は哲学者で広島大学名誉教授の山本空外先生にご揮毫いただいたものです。広島出身の空外先生はご自身も原爆に遭われるとともに、多くの教え子を失います。「争いの繰り返しは、人類破滅にほかならない」と先生は大学で教鞭をとられるとともに僧侶として真の平和を希求されました。自分と相手がよい関係を保つためには、相手を受け容れること、相手を受け容れるには、自分の心の深さがなければならない。それがないと争いになり、共倒れになってしまう。そうならないためには相手を生かして、自分のはたらきを実らせる「無二的人間の形成」を説かれました。

先生の説かれた道は「天地万物の恵みによって

生かされていることに感謝しよう。その感謝の気持ちを日々の生活の中で実践していこう」という校訓の趣旨に通じるものがあります。みなさんの卒業にあたり、校訓碑のいわれをお伝えしておきます。また、校訓碑の移設にあたり、学校創立時の施設で唯一旧校地に残っていたグラウンドと校舎を結んでいた石造りの階段の一部を新校地での校訓碑の基礎部分として移しました。

ところで、本校のある先生が扁額の感想を次のように伝えてくれました。

「本当に達筆です。私は日本独特の習字の文字の流れが大好きです。習字は二度書きが禁止されております。形を整えようと、つつい修正したくなりますが、味がなくなってしまいます。あの習字を見たときに修正なしに、まさに三つの言葉が一つの熟語のようにになっている達筆には感動いたしました。我々も習字のように流れを大事にし、変に装うことなく、素直に生きていきたいと感じました。『自分に素直でいろ！ 自分に嘘をつくな！』これは生徒にいつも言っている言葉です。素晴らしい建学の精神をさらに向上させるために、今後も今いる生徒を大事にしながら、己の夢と向き合っていこう。そう決意させてくれた本当に素晴らしい達筆です。」

ここまで心を揺さぶられるとは。思いがけずこの先生の感性に、想いに学ぶことができました。